(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	介護施設における看取りの現状と展望
演者名	柳楽知義、平山東、西岡啓介、横山敬輝、坂本梨沙、辛龍文
所属	医療法人光輪会 光輪クリニック

【はじめに】ここ数年、介護施設が次々と開設され、それに伴い、医療機関で最期を迎えていた日本の「病院看取り」が、「在宅看取り」へとシフトしてきている。

我々は、いち早く「在宅看取り」への取り組みを行い、積極的に在宅看取りを行ってきた。特に、「施設看取り」という、介護施設で最期を迎えられるケースにおいて、現状における問題点と将来への展望について検討した。

【方法】2013年1月1日から2014年6月30日までの18か月間、我々のクリニックが担当する39施設、入居者数約1517名のなかで、施設で看取りを行った症例について検討した。

【結果】18か月間で、130例の施設看取りを経験した。男性が44例、女性は86例であった。死亡時年齢の内訳は、71-75歳 2例、76-80歳 10例、81-85歳 16例、86-90歳 47例、91-95歳 27例、96-100歳 25例、101-105歳 3例であった。死因としては、老衰80例、癌21例、肺炎7例、心不全など5例、脳梗塞など2例、ALS2例、その他13例であった。

【考察】心疾患、脳血管疾患、肺炎で亡くなった例は少なかった。これらの急性期疾患では、救急搬送など、病院受診が選択されるケースが多かったからだと考えられた。死因のうち、60%以上が老衰による死であった。老衰で亡くなるケースでは、特に在宅看取りの需要が多くなってきていると考えられた。癌で亡くなった方は、老衰に次いで多かった。高齢者の癌では治療適応とならず、入院を拒否されることも多い。癌患者も、施設で最期を看取るケースが増えていると考えられた。

居宅での看取りと違い、介護施設の看取りでは、施設スタッフに対する教育指導が不可欠であり、主治医、看護師、介護士とがしっかりと連携していく必要がある。施設看取りは今後も増加の一途をたどると予想され、施設とのさらなる協力体制が望まれる。